The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	江戸文・雅俗・上文 : 研究同人誌と私
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	雅俗. 2012, 11, p. 105-107
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/49362
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

江戸文・雅俗・上文

―研究同人誌と私―

飯倉　洋一

◎プロフィール

●生年月日　一九五六年九月一日

●卒論題目　「上田秋成の思想――「私」の説を中心として――」

●デビュー論文　「秋成の「私」の説について」（「語文研究」50号、一九八〇年一二月）

●思い出の研究書（論文）　中野三敏先生「寓言論の展開」、日野龍夫先生「上田秋成と復古」

●研究以外の趣味　特になし

自分の研究を振り返って何か書けという編集部からの依頼であるが、まだまだ未熟な学徒であって、振り返るような年齢でもない。そこで私の関わった研究同人誌のことを書かせていただくことにした。私の研究履歴というものがあるとすれば、それは研究同人誌とともにあるような気がするからである。

私が九州大学文学部の国語学国文学研究室に進学したのは昭和五十二年の秋だった。その年の八月に『文献探究』が創刊されている。故花田俊典さんをはじめとする当時の院生たちが創刊した雑誌である。学部生の私は秘かに憧れ、夜遅く一人で研究室に残った時に、院生部屋に忍び込んで、『文献探究』を発見して貪るように盗み読んだ。学部生が購読したいと申し出るような雰囲気はなかったのである。

小学生の頃から一人で回覧新聞や回覧雑誌を発行して喜んでいた私は、『文献探究』の編集担当になった時には、刊行ごとに同人の近況を伝える「文献探究だより」という刷り物を作った。このあたりが研究同人誌への編集的関わりの始まりか。「文献探究だより」はまもなく消滅。

さて九州大学関係の近世文学研究関係者もまた、研究同人誌を断続的に刊行してきた。私が大学院に入ったころには、中村幸彦先生門下の井上敏幸先生を中心として、新しい雑誌『江戸時代文学誌』を刊行しようという機運――中村先生の古稀記念というモチベーション――が盛り上がっていた。同人グループは柳門舎と称した。新雑誌構想に際しては、杉浦正一郎門下の白石悌三先生らが出していた『近世文芸資料と考証』（七人社、一九六二年～一九七八年）が意識されていた。『資料と考証』は背表紙に黒い四角を積み上げて号数を表すなど、デザイン的にもセンスがよく、隅々まで行き届いた雑誌だった。『江戸時代文学誌』も、それに負けじとさまざまな趣向を凝らす。タイトルは木活字本の『大平御覧』から集字。表紙には、毎号九州にちなむ

文人の蔵書印をあしらう。表紙の紙質もこれまでにない手触り、そしてビニールカバー付き、限定番号入りであった。正直なところ、カバーと限定番号は凝りすぎで、このために発送作業に丸二日を要することになってしまう。当初編集作業は井上先生と白石良夫さんが中心となり、院生らが手伝うという形で行われた。空白頁どころか空白行も極力作らないという方針だった。ここで私は編集の基本を学んだように思う。ちなみに罫紙で管理していた購読者名簿をカード型にしたのは久保田啓一さんの大英断だった。

『江戸時代文学誌』（我々若手は江戸文と略称していた）では合評会というものが行われた。十数名の同人が温泉などに泊りがけで行くわけで、当然親睦会を兼ねているのだが、合評自体は数時間かけて徹底的に行われるのである。第六号に『春雨物語』の「海賊」論を書いた時には、中野先生から延々と（私の記憶違いでなければ三十分以上にわたって）批判され、さすがに落ち込んだが、考えてみれば、師からまともにご批正を賜る機会など滅多になかったので、本当に有り難かった。

最終号には「常盤潭北論序説――俳人の庶民教化」を書き、私なりに新しい視界が開けた。俳諧研究者にコピーをお送りしてご返事を頂いた時には新鮮な感じがした。江戸文は、私を研究者として育ててくれた研究同人誌なのである。

江戸文は当初から八号終刊が決まっていた。ただし八号出すのに十一年かかった。それから二、三年が経ち、そろそろ江戸文創刊当時の井上先生の年齢に差し掛かってきた私は、江戸文の跡を継ぐ研究同人誌の刊行を思い立つ。研究会で提案したら、同世代の仲間たちが「やろう」と乗ってきた。タイトルは衆知を集めた。園田豊さんが提案してきた「近世雅俗」の、「近世」を除いたものが、採用された。デザインはロバート・キャンベルさんが担当。表紙中央にただ「雅俗」と号数のみが記されたシンプルなデザイン。これは四号ごとに変えることに。書型はA5判よりやや縦長、本文は一段組み。文字の色については二案あったが、五号以降から変えることに。どこにもない外見の学術誌となった。内容的には毎号特集を組むこと、特集には同人以外にも寄稿をお願いすること、中野先生の連載（雅語俗録）を掲載することなど、『江戸時代文学誌』と一線を画すことにする。私が最も重視したのは、定期刊行の死守である。毎年一月に必ず刊行するために、原稿の催促は厳しく行った。『雅俗』は、研究同人誌としては、驚異的な購読者数がいた。第五号から後輩の川平敏文さんに編集を譲ったが、頑張ってくれて当初八号の予定が十号まで伸びた。

この雑誌は江戸文の時と同じく研究会と連動していた。『雅俗』には研究会で読んでいた書簡の影印と翻字を掲載した。それとともに参加者は必ず発表（報告）することが義務付けられている若手主体の研究会を新たに発足させた。ここでメンバーの批判を受けた上で、中身をさらに充実させ『雅俗』に投稿という道筋を作ろうとしたのである。これは一定の成果を出したのではないかと思う。ここで鍛えられて現在活躍している四十代の研究者は少なくない。研究会は「雅俗の会」と称し、これが『雅俗』刊行の母体であった。刊行ごとに合評会を開催したのは言うまでもないが、合宿という形はとらなかったことが多かった。

二〇〇一年に私は大阪大学に転任した。大

阪大学の日本文学研究室は大阪大学古代中世文学研究会が『詞林』という同人誌を年二回発刊していた。しかるに古典文学で近世専攻の学生が書ける媒体がなかった。『詞林』に合流するというのもひとつの考えであったが、「古代中世」を謳われている限りそれも難しい。かといって近世の教員と院生だけでは年一回の刊行を維持するのは困難であろう。これはもうＯＢに頼るしかない。福田安典さんをはじめとする数名の方に構想をお話し、御批正を受けながら、新しい同人誌の創刊を目指した。キーワードは「上方」で、「上方」に関われば、時代的にも近世に限定せず、専門分野的にも日本文学に限らず、様々な人が参入できる同人誌をめざした。題して『上方文藝研究』。略称は「上文（かみぶん）」。発行母体は「上方文藝研究の会」である。当時関西には、『大阪俳文学会会報』、『演劇研究会会報』、『混沌』など、ジャンル的に特化した研究誌があったが、このような切り口の雑誌はあまりなかったように思われたからである。創刊号を二百部日本近世文学会の会場に持ち込み、無料頒布。ただし、二号以下の購読をお願いした。結果は二百部が完全に捌け、百名以上の購読者を獲得できた。

『上方文藝研究』は当初、院生と呼びかけに応じてくださったＯＢら二十名程度で出発した。島津先生が同人になるとお申し出くださったのには恐縮するやら感激するやら。さて、刊行を重ねるにつれ、ＯＢ以外の同人もかなり増え、六十名を超えた。日本史学・人文地理学専攻の方が同人となって投稿されたこともある。中世和歌文学専攻の浅田徹氏が常連の書き手になるなど、創刊時には想像もできなかったことである。定期刊行を墨守すること、そして刊行ごとに合評会を開催することは『雅俗』と同じである。合評会の厳しさは、雅俗の会に勝るとも劣らない。この年になってもやはり緊張するのである。

このたび『雅俗』が装いも新たに復活するという。実に嬉しいニュースである。若手は研究会で育てられる。それを形にする媒介は非常に重要だと私は考えている。国文学系の商業誌が立ち行かなくなった現在、研究同人誌の役割はむしろ大きくなっている。その自由度は大きな可能性を持っていると思うからである。